

『来るべき方に備えて』 (要旨)

聖書箇所：マタイ 3:1～12

【1】 荒野にいたヨハネ

人が住むのに適していない場所。それが荒野です。ところがその荒野に人々があふれました。ユダヤの荒野を目指して、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン側周辺のすべての地域から人々がやってきたからです。その目的は荒野にいたヨハネのもとに行くためでした。そのために手間暇かけてやってきたのです。

そのヨハネは、風変わりな格好と食生活で知られていました。福音書記者マタイは「らくだの毛の衣をまとい、腰には革の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった」(3:4)とその特徴を記します。その姿はユダヤ人の誰もがよく知る旧約の大預言者エリヤを彷彿とさせました(参照:Ⅱ列王 1:8,マテ 4:5)。人々はこうしたヨハネの出現に、時代の節目を迎えていると理解したのでしょう。

▷荒野に行った人々は、普段、自分がしていることを止め、ヨハネが語ることばに心を向けました。

【2】 来るべき方に備えて

荒野にいたヨハネのメッセージはとてもシンプルでした。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(2)。彼は自分の役割が「差し迫った神のさばき」(10)と、「さらに力のある方」(11)が来ることを告知することだと理解していたので、その働きに徹したのです。

私たちの立ち振る舞いは、自分のいる環境に左右されることがあります。学校、職場、そして家庭で見せる顔が同じとは限りません。しかし荒野では、漁師、取税人、農夫たちそれぞれが神の前に、自分がいかなる者であるのかを問われました。そして心に罪を示された者は、罪を告白し、バプテスマを受けました(6)。

ヨハネは荒野で人々を悔い改めに導き、洗礼を授けました。それは来るべきお方に備え、「主の道を用意」(3)するためでした。

【3】 悔い改めるとは

荒野にいたヨハネの存在をユダヤ人の指導者も無視することができなくなりました。大勢のパリサイ人やサドカイ人がヨハネのもとにや

ってきました(7)。彼らは表面上、悔い改めのバプテスマを受けに来たように見えました。しかしヨハネは、彼らが自分の罪を認め悔い改めていないことを即座に見抜きました(7-12)。彼らはパリサイ人、サドカイ人の顔でヨハネのもとに来ていたのです。

「悔い改め」とは、自分の不足を認め、より良い自分を目指すということではありません。神の前で自分の罪を告白し、その神に立ち返ることなのです。しかしパリサイ人やサドカイ人はヨハネが自分たちの目に適う人物かを調査することに夢中で、ヨハネの語ることばを自分の問題として受け入れることが出来ませんでした(参照:マテ 21:25,32)。そうして神様の前に悔い改める機会を逸してしまったのです。

さてヨハネは「…良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます」(10)と語りました。ユダヤ人であれば、誰もが認めるアブラハム。パリサイ人やサドカイ人には「われわれの父はアブラハムだ」(9)というプライドがありました。アブラハムの子らである自分たちは当然神に認めてもらえると自負していました。ヨハネはそうした彼らの安心しきった自己評価にメスを入れ、神様の目から見て、あなた自身が「良い実」かどうか問われているのだと語るのです。

「ルターは『小教理問答』の中で洗礼について触れ、こう書き記しました。『古いアダムは溺れて死ななければならない』と。しかしほかの箇所にもルターはこう書き記したそうです。『どっこい、この古いアダムは泳ぎが大の得意なのです』」(芳賀力『洗礼から聖餐へ』キリスト新聞社)

古い自分を捨て、新たに神様とともに生きたいと願う者にヨハネは語りました。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(2)と。

▷着飾ったあなたの心のよろいを外し、神様のことばと向き合うことができますように。

